

本科目は、1 回生前学期の「生活環境科学概論(必修)」を受けた学生が受講した。その講義では、地球環境問題の要点をさまざまなデータに基づいて、科学的な観点から定性的のみならず、定量的な要素を取り入れて論じた。今回は、毎回現在の環境問題のトピックスのビデオや論文を読みながら、受講生同士に議論させた。

ディベートに際しては、受講者が予め主題に対して賛成・反論の組を決めるのではなく、その場で授業者がランダムに 2 つのグループに分けるという手法を取った。その狙いは、受講者がどちらか一方に偏ることなく「問題の本質は何か？」を賛否の両方を考えながら、より本質に迫ることを期待したからである。

テーマの一つは、「CO₂が世界を救う」(東大生産技研教授 渡辺 正氏)というもので、様々なデータを根拠に、著者が専門とする植物の生産活動に関する研究に基づいて論じたものを使った。

このテーマに対して、受講生に与えたインパクトは予想通り大きなもので、その中の意見には、次のようなものがあった。

①「以前から、環境問題については、起きているという人と起っていない、温暖化なんて嘘だという立場の人がいることは知っていたが。それとは違い、温暖化によって救われるという発想は始めてであった。初めその発想を聞いたときは本当に驚いたが、読んでみると、なるほどと思う部分もあった。どの考え方が正しいのか分らないところが環境問題の難しいところだな、と思う。」

②「内容の一つひとつが大変興味深く、本当は温暖化は存在しないのではないか？と思う程感心することばかりであった。普段くだらない会話ばかりしている仲間と環境に関して真剣に話し合い、自分以外の人が環境についてどのように考えているのかを知ることができ、大変良い刺激になった。」

③「日ごろマスメディアからの情報を得て、取り上げられていることは全て真実であり、地球温暖化は悪だと捉えていた自分の考え方に対して、一つの事柄について客観的に見て、

正しい情報の取捨選択を行うことの必要性を感じた。」
等である。

その他に、「コンビニの終夜営業は必要か？」やエネルギー問題に対して「原子力発電の是非は？」等を取り上げた。後者の場合は、原子力発電に「賛成・反対」ではなく、「容認するか・容認できない」か、を議論させた。

このような機会に望んだことに対して、次のような感想を述べている。

①「自分の考えと他の人の考えを比べながら考えることができるので、とても良い授業形式だと思う。また、賛成派になるか、反対派になるかを自分の意志で決めるのではなく、授業の際に決められて分かれるのも良かったと思う。それは、自分の意見に固執するのではなく、本当はこっちの考え方ではないが、こんな意見もあるな、と自分自身の中で気づくことも多かった。」

②「テーマが、どっちが正しいと決められるような事例ではないので、様々な意見を言うことができたし、片方に意見が集中するということもなかったと思う。」

③「今までにない授業形式で、ちゃんと友達と向かい合って話をすることができた。討論に慣れていなかったのも、自分お言いたいことと自分が言っていることがうまく繋がらないことがあり、伝えられないことがたくさんあった。もっと、うまく伝えられたらよいな、といつも思っていた。今後は、色々な機会を通して、自分の考えをうまく伝えられるようになりたい。」

さらに、ビデオを使った授業に対しては、「今まで知らなかった新しい情報が取り入れられたと思う。」というものがほとんどであった。しかし、「今後は、活字になったものは正しい。ビデオに対しても、間違っただけではない、ということではなく、内容は必ず著者や編集者のフィルターにかかっているということを入れた上で、自分の考えをまとめるようにしたい。」という者があり、授業者の意図は、その点で達せられたものと思う。